投　稿

南国の光
－マレーシアの障害福祉にふれて－

潟上市　小　林　　顕

要　旨

イギリスから独立して五十年余の南国マレーシアの三箇所の知的障害福祉施設を訪問した。マレーシアの障害者福祉は特異な社会事情の中で政府主導ではなくボランティア精神に根ざした民間福祉活動で支えられている。この福祉活動の根底には高い宗教的理念あるいは倫理的人権擁護精神またあるいは強い民族的相互扶助精神が厳然と存在し、この国の障害者福祉は高いレベルにまでエンパワーメントされているという印象を持った。福祉施設利用者の屈託のない明るい笑顔、堂々とした立ち居振る舞いなどから窺われる障害児者御本人の落ち着いた心と内に漲る自信などから、この国の知的障害児者当事者たちの幸福度は必ずしも日本に劣るわけではないと感じた。むしろ日本において障害福祉に携わる我々医療福祉関係者はマレーシアに学ぶところがあると思われた。

プロローグ

風の強い秋の日の朝のことだった。いつものように小学校の支援学級に通う三男のエイスケの手を引いてグランドの脇に差し掛かった時のことである。突如、折からの突風で傘を後ろに煽られたエイスケは叫び始めた。「かぜ！やめろ！あっちへいけ！いいかげんにしろ！」

あっちへ行けといっても吹き荒れる風は消えてなくなるものでもない。冷たい雨混じりの強風は父親が傘で遮ろうとしても容赦なくエイスケに当ってしまう。「もう、こいごいだ！(こりごりだ！)」とエイスケは小学校の玄関に入るまで怒っていた。

心身のご不自由なご老人を診ることが私の仕事であり、知恵おくれの息子と暮らす生活が私の人生である。子供あるいは親の出来の良し悪しに関わらず、親にとって子育てというものは元より苦労と心配の連続である。故に子供の知恵がおくれているとしても、親の苦労というものはせいぜい数倍にはなるだろうが何十倍などにはなるものでもない。しかしうちの場合親の苦労の一番目はエイスケの身の安全の確保である。雪が解けて柔らかい日の光が大地に降り注ぐ頃になると、あてもない散歩が好きな父親によく似て、エイスケは一人無断でひょいと家から外に遊びに行く。横断歩道の信号の色の意味をよく解さぬエイスケはまた、歩道と車道の区別もあまりない。彼の闊歩たるや自由自在である。いざエイスケが家にいないとなると交番の巡査の世話になること必至。今まで幾度110番したことか。何時ぞやは、歩いて十五分の隣の町内の屋敷で保護されていた。電話連絡をもらい巡査と一緒に駆けつけた時、その家の親切な小母さんに美味しいバナナを食べさせてもらい、ニコニコ上機嫌のエイスケの満面の笑顔は決して忘れない。そしてまた、親の一番の心配は何かといえば彼の将来のことである。エイスケには是非とも幸せな一生を送ってもらいたい。

エイスケと一緒に過ごすこんな日常の中で突然大震災が起きた。その後知らされた海外から被災地への心のこもった支援の数々。

「世界は優しいなあ。はてさて、外国の障害児はどんな人生を生きているんだろうか？幸せなのか？…日本の障害児は幸せなのか？」ちょうど国際学会でマレーシアに行くことになっていたので、せっかくだから外国の障害児に会って来ようと思った。何か光が見えるかもしれない！

マレーシアという国はインドシナ半島から、さらに南に細長く突き出たマレー半島の熱帯の国だ。渡航前にマレーシアの日本大使館にメールを送った。「クアラルンプールの福祉施設を視察したいので何とか施設をご紹介いただけないものでしょうか？」何とまあ！その翌日！在マレーシア日本国大使館領事の高柳一夫さんから、「妻が役員をやっているクアラルンプール日本人会婦人部のかとれあ会で障害者施設にボランティア活動や寄付を行っており、大使館や日本人会と現地の施設の間で交流があるので大丈夫視察出来ますよ」という嬉しい返事が来た。かとれあ会で訪問している福祉施設の利用者の写真も一緒に送られてきた。写真に写っている向こうの施設の子供たちの顔はエイスケとそっくりじゃないか！平成23年６月19日、私はマレーシアに向けて出発した。そして私はマレーシアの知的障害関連福祉施設三箇所を訪問した。

マレーシアの社会と福祉

施設の紹介をする前にマレーシアの歴史・民族・社会について説明する。日本とマレーシアでは社会があまりに異なるので、その理解なしにはマレーシアの福祉の理解が難しいからである。単一民族国家の日本と違いマレーシアは多民族国家であり、50年ほど前にイギリスから独立したばかりの発展途上国である。歴史的には紀元前から先住民族が遊牧生活をしていたが７世紀頃にヒンズー教がインドからもたらされた。その後15世紀初めにクアラルンプールの南方にイスラム教のマラッカ王国が建国されマレーシアという国家とイスラム系マレー民族の基礎ができた。16世紀にはヨーロッパ各国は帝国主義の時代となり最初はポルトガルがマラッカ王国を攻略し、17世紀にはオランダが併合した。19世紀以降はイギリスに統治されたが太平洋戦争開戦に伴って英領マレー連邦は我が大日本帝国に敗戦まで占領された。

終戦後は再びイギリスが1957年のマレーシア独立まで権勢を振るった。イギリスは植民地政策において民族間の摩擦を少なくするために空間的・社会的隔離政策をとった。民族ごとに居住地域を区画化して分割統治を行った。20世紀に入ってからもこの分割統治政策が継続され、このイギリスの植民地政策が民族間相互の統一を阻み続けた。約500年間ヨーロッパ諸国の統治が行われる中で大勢の中国人が中世においては明との交易に関連して、そして近世においても錫鉱山の労働者としてマレーシアに移住した。中国人はスランゴール州を始めとする錫生産地や都市部に部落を作って住み着いた。中国人は彼らがどこの国でもするように仏教や道教の寺院を建立しそして中国語の学校を作り、中国語を話し中国人街をつくった。中国人は勤勉であり、貿易や商業、錫鉱山での労働といった近代的産業で大きな勢力となり、経済的に土着のマレー人より裕福になっていった。マレーシアにはマレー人と中国人の他にインド人もいる。インド人はおもに19世紀以降、天然ゴムのプランテーション農業の労働者として南インドやセイロンから移住し、ヒンズー教の寺院とタミール語の学校を造り、インド文化とヒンズー主義を維持した。土着のマレー人は最多数を占め、イスラム教徒であり、マレー語を話し、自分たちのモスクとマレー語を教える学校を持つ。マレー人は元来、農業や漁業などの伝統的な第一次産業分野に従事し多くは村での牧歌的な生活に満足していた。マレーシアのこれら三民族は民族間の婚姻などによる融合が少なく、それぞれの民族が独自の文化を保ちながら共存する複合民族社会となっている。

さて、イギリスから独立した後、三民族間の対立と経済的な不均衡が一層増大し、中国人は裕福であったがマレー人やインド人は幅広く貧困が残ったままであった。そして民族間の経済格差による不満と怒りが鬱積し、1969年にクアラルンプールで民族衝突が生じ数百名の中国人が犠牲となった。この民族暴動を受け、1971年からマレーシア政府は与党連合国民戦線のラザク、フセイン、マハティール首相らによるブミプテラ政策と称する民族間の社会・経済的不均衡を解消するための新経済政策を導入した。この大規模な政治的介入により徐々に経済の成長と政治的安定がもたらされ、同時に政府はマレー人を社会の主流に置くことに成功した。現在、民族構成は全マレーシア人口2940万人中、およそマレー人65％、中国人25％、インド人７％である。

新経済政策の下に都市部での人口増加とスラム化が生じ、マレーシアの社会福祉政策においては貧困問題、薬物依存、アルコール依存症、売春、少年の非行、児童女性虐待などの多くの喫緊の課題が多く、障害者福祉や老人福祉の優先順位は低かった。マレーシアでは病院はあるが公的医療保険制度はなく、福祉施設はあるが介護保険制度や障害者総合支援法に相当するものはない。障害者福祉を実施している主体は何かと言えば、大部分が民間のＮＰＯ(非営利組織)あるいはＮＧＯ(非政府組織)である。障害者の福祉に関する政府の役割は独立以来長く曖昧であり、1990年にようやく政府の障害者福祉委員会が発足したような状況である。

今回訪問した三施設を含めて、かとれあ会でボランティアや寄付活動をしている三十箇所あまりの施設はすべて、ＮＰＯあるいはＮＧＯであり、デイスプリング知的障害児通所訓練施設は政府からの援助を受けておらず、他の二施設では政府援助を受けているが微々たるもので、あまり当てにはしていないということであった。要するにマレーシアにおける障害福祉活動は民族あるいは宗教に基づく連帯の中で、あるいは障害者の権利擁護という理念のもとに、政府主導ではなく地域住民の中からその必要性ゆえに生まれ出たものである。独立前の植民地時代に設立された施設も多く、また独立後も長く政治が不安定であったので、ほとんどの施設が政府からの援助を期待せず自助的あるいは相互扶助的な活動として設立されたものと考えられる。現在に至るまで、福祉施設の運営資金は、中国系の施設は中国閥からの援助、キリスト教系の施設の場合はキリスト教教会からの援助、マレー系の組織においても民族やイスラム教の支持組織からの援助等であり、その他障害者団体、銀行を含む企業などからの資金援助、寄付金、家族の負担金等であろうと思われる。

今回訪問したマレーシアの三つの知的障害児者関連施設

1．デイスプリング・スランゴール知的障害児者通所訓練施設
（利用者 70名　７歳～32歳）
2．ユナイテッド・ヴォイス知的障害者通所職業援助施設
（利用者130名　20歳～36歳）
3．ブキナナス障害者入居施設
（入居者 37名　50歳～90歳）

子供たちの輝く笑顔
ーデイスプリング・スランゴール知的障害児者通所訓練施設（写真１）ー

この施設は錫鉱山で繁栄したスランゴール州クランの中国系マレーシア人居住区にある知的障害児者通所訓練施設である。青々とした南国の蔦草の絡まる大きなアーケードをくぐると、この日、通所訓練に来ていた20名ほどの生徒さんたちが押し寄せるように我々を出迎えに来てくれた。小さい子供もいれば高校生ぐらいの利用者もいる。多くは中国系の利用者だ。子供たちは礼儀正しく皆さんハローハローと言いながら笑顔と握手で我々を出迎えてくれた。南国の初夏の日差しの中で子供たちの笑顔は輝いて見えた。中国系の理事長のジミーさんとインド系の園長のマダム・ジプシー・カラマールさんも笑顔で出迎えてくれた。

利用者の年齢によってクラスが年少組（７歳から12歳）と年長組（13歳以上）に分かれており、それぞれ別々にカリキュラムが組まれていた。作業場では年長組の生徒さんたちが作業をしているところであった。作業場は五十畳ほどの広さでマレーシアに一般的なバンガローハウスを改築したものだった。いわばテラスに屋根が付いたような所で周りの四方のうち二方は壁がない。

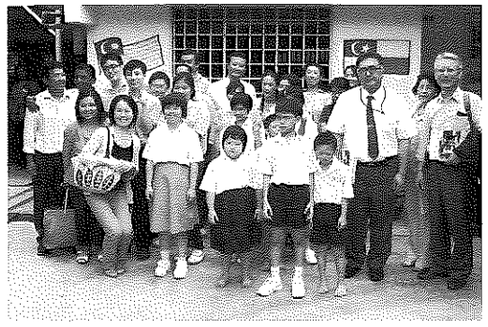

写真１　デイスプリング・スランゴール知的障害児者通所訓練施設
かとれあ会の方々や子供たちと一緒に。

風通しが良くて涼しくそして明るかった。長い作業台が整然と並べられ、５～６人が１グループで合計３グループほどが作業をしていた。作業の内容は、①ケンタッキー・フライドチキンの店で出されるスプーン、フォーク、紙製手拭セットの袋詰め作業、②プラスチック製ストローの袋詰め作業、③グリーティングカード等の制作などであった。基本的に、選別→袋詰め→ラベル貼りという順序の流れ作業で、最後に生徒から選ばれた監督者が製品をチェックして品質管理を行っていた。カンティーン（食堂）は窓が日光をうまく取り入れるような構造になっており南国の光で室内は明るかった。ここで年長組の生徒たちが当番制で昼食を作るということであった。年少組のクラスでは指導員の方と一緒に子供たちは図画工作やお勉強をしていた。年長組では月曜日から金曜日まで朝９時から16時半までの時間割が組まれており、時間割表には英語で、assembly、reading、writing、sewing、language、moral、academic、civics、physical education、art & craft、pre-vocational、music class、pre-practical session（self help、home science）、classroom dutyなどの課目があった。

最後に会議室でジミー理事長が施設について説明してくれた。この施設は1988年設立され、立ち上げに際してはＪＩＣＡが指導し、日本人のアケミさんという方の功績が大きかったそうだ。現在、職員は10名でボランティアが２名、運営費は寄付と利用者の親からの授業料で賄っており、政府からの援助は全く受けていないとのことであった。政府援助を受けるためには施設内にイスラム教の礼拝所を作らなければならないという規則があり、これがこの施設にとって受け入れ難いということであった。この施設にはクアラルンプール日本人会は毎年寄付をしている。

「施設を卒業した知的障害者は外の一般の職場で働いているのですか？」と私が聞くと、「彼らが一般の職場で働くことはやはり難しい。保護作業場で働かざるを得ないのが現状です」とジミーは話していた。私の小さい子供も実は知恵おくれで…とお話したところ、一冊の分厚い本を奥から持ってきてくれて、「この本は六歳までの知的障害児の指導書です。うちの施設は前は小さい子もみていましたが今は年長の子供だけです。もう必要ないのでアキラにあげます。」ということで、Robert Deller著のA Curriculum Guide For Teaching Young Mentally Handicapped Children (1991)という本をいただいた。ジミーはニコニコしながら「アキラ、日本に帰る前に二人で飲み屋でも行ってゆっくりもっと話がしたいね！」と言ってくれた。ジミーはとてもフレンドリーな人だった。

セルフ・アドヴォカシーの現場
ーユナイテッド・ヴォイス・クアラルンプール知的障害者通所センターー（写真２）ー

ユナイテッド・ヴォイスは2005年にマレーシアに設立された知的障害者の自立と社会参画を推進するＮＧＯである。会員は15歳以上のダウン症、自閉症、注意欠陥多動性障害、脳性麻痺、広汎性発達障害やその他の学習障害の方々である。「障害を持つ方々が社会生活に適応し、社会の一員として仕事をし、社会に貢献し、個人として尊敬されることを目標とする」という理念のもとに運営されている。具体的には社会的企業（ソーシャル・エンタープライズ）としての保護作業場を開設して障害者を雇用し、会員が製作した商品をユナイテッド・ヴォイスの事業所で販売している。さらには一般の労働市場での知的障害者の雇用の推進を図り、2010年においては130名の会員中33名が一般の労働市場すなわちスーパーマーケット、工場、小売店、事務所などで雇用された。その他、啓蒙活動、他の障害者団体や権利擁護団体との連携推進、政府や政治家との意見交換、学習障害の方々のための権利擁護活動、国際的活動などを行っている。現在、役員９名、職員８名で運営し、学習障害などの会員130名のうち20数名は常勤職員として保護作業場で雇用されている。運営費は、銀行や企業からの寄付、国際的に人道支援を行っているキリスト教系のＮＧＯのワールド・ヴィジョンからの資金援助、会員からの会費などであり、政府からの援助は全運営費のわずか１～２％である。クアラルンプール日本人会も毎年寄付をしている。

写真２　ユナイテッド・ヴォイス・クアラルンプール知的障害者通所センター
秋田大学井上浩名誉教授御夫妻、高橋圭太先生と一緒に。

ユナイテッド・ヴォイスの本部事業所はクアラルンプール市街地のど真ん中のビルであった。入り口を入るとそこは店舗になっており、会員が作ったマグネット、しおり、織物のテーブルセンター、コースター、物入れ、また、絵画、陶器製のオブジェなどの商品を販売していた。奥は作業場になっており、青年から中年の方までの知的障害や学習障害の方が20名ほど机に向かって、あるいは機織り機に向かって作業をしてい

た。彼らの中には常勤で就労し賃金を得ている方たちもいる。民族的にはマレー系、インド系、中国系の偏りはないようであった。

応対してくださった中国系の若い女性職員のウェイさんに「彼らは訓練しているのですか？」と聞いたところ、「とんでもない！仕事をしているんですよ！」と叱られた。「仕事」をしているということが重要なのである！作業の内容は主に店舗で販売する商品を作ることであった。面白いことに、作業場には日本で昔よく見たような木製の織り機があり「さおり織」の織り機と呼ばれていた。若い男性の通所者が幅30センチほどの「さおり織」を織っていた。「さおり織」とは黄、橙、赤、青、紫、黄緑、緑など、様々な色の木綿糸を経糸と緯糸にして織る平織である。作業場のさらに奥はベイカリーになっていてチーズケーキやチョコレートケーキなどを作っていた。ベイカリーの厨房には日本の外務省のODA（政府開発援助）で贈られた冷蔵庫があった。その日でき上がった、かわいいケーキがテーブルの上に沢山並んでいた。私はチーズケーキをいただいたがとてもおいしかった。

二階にある、スクリーンのある会議室で、学習障害の方、本人によるセルフ・アドヴォカシーに関するプレゼンテーションを聞いた。発表した学習障害の方はいくらか訥々ではあるが堂々と話しをされていた。英語の発音もしっかりしており、なかなか深い内容のプレゼンテーションであった。彼は以前、ドイツで開かれた会議でも発表したそうである。その発表の様子や立ち居振る舞いから発せられる彼の「自信」に私は感銘を受けた。会議室の隣はギャラリーになっており、学習障害等の方たちが描いた絵画が展示・販売されていた。私はこれらの絵の純粋さと芸術性に感銘を受けた。見とれてしまって帰りの時間に遅れ、一緒に来てくださった方々に迷惑をかけてしまった。

南国の光あふれる作業場で
ーブキナナス障害者入所施設（写真３、４）ー

クアラルンプール市街のブキナナスの丘にあるブキナナス障害者センターは、元は1852年にローマン・カトリック教会のフランス人宣教師たちが建てた女子校であった。ブキ・ナナスBukit Nanasとはマレー語でパイナップルの形をした丘という意味である。学校の裏のジャングルから赤ちゃんの泣き声が聞こえ、シスターがその孤児を保護したのが福祉施設としての始まりである。孤児院だった頃は1911年から1960年までの間、約2500人の孤児が育った。1962年からは政府の福祉局で孤児を受け入れることになったので現在は孤児の受け入れはない。1975年からは身寄りのない身体・知的障害等の女性が生活して一生を終える施設として運営されている。現在、入居者は35名のご婦人で年齢は50歳から90歳である。彼女らの障害は、知的障害、身体障害、聾唖、視覚障害などである。シスターも100年前には30人以上もいたが、現在は４人の中国系のシスター（ヒアシンスさん、ルーシーさん、アンドレアさん、ベティーさん）、

写真３　ブキナナス障害者入所施設
知的障害のある高齢の入所者の方々の作業風景。イギリス人ボランティアのローレンさんが指導されている。

２人のヘルパー、３人のインド系の厨房職員、数人のボランティアで、35名の入居者のお世話をしている。たまに、医師がボランティアで往診に来てくれるが、入居者の健康状態は主にシスターたちが管理している。体調が急変したときは救急車を呼んで病院に搬送してもらうとのことであった。

ブキナナス障害者入所施設は壁に重厚な尖塔アーチが連なる見事なヨーロッパ風の建物であった。建物の一角にイエス・キリストを抱いた清楚な聖母マリアの像が立っていた。施設長でシスターのヒアシンスさんが出迎えてくれた。我々は最初に作業場に案内された。作業場は建物の入り口より階段を数段降りた広いフロアーで、十数名の身体障害、聾唖、視力障害の方々が作業をしていた。あるグループは分業で色とりどりの裂き織りを制作し、またあるグループは機械式の懐かしい形のミシンで綺麗なパッチワークを作っていた。この作業場ではシスターのアンドレアさんが指導していた。

次に別の棟にある知的障害者の方たちの作業場に案内された。そこはかなり広いフロアーであった。広い作業場の窓はすべて開閉式のガラスのスリットになっており、涼しくて採光も申し分ない環境であった。

写真４　ブキナナス障害者入所施設
クアラルンプール日本人会婦人部かとれあ会の方々とご一緒に。

壁にはイエス・キリストが民衆に教えを説いている様子を描いた大きな横長の油絵が懸かっていた。８名の知的障害の年配のご婦人が大きな長方形のテーブルに向かって椅子にゆったり腰かけ、絵画制作や工作などの作業をしていた。イギリス人女性ボランティアのローレンさんが英語でご婦人たちに話しかけたり、冗談を言って笑わせたり、お茶を出したり、トイレに行くときの歩行の介助をしたりと、その他いろいろ入居者さんのお世話をしていた。作業場にはインドを舞台にしたレオ・ドリーブのフランスオペラ「ラクメ」の美しいアリア「花の二重唱」がＣＤラジカセから流れていた。室内のインテリアは西洋風で、とても優雅な雰囲気であり、ここがヨーロッパであるかのような錯覚を覚えた。

シスターのルーシーさんが知的障害のご老人たちのドーミトリー（共同寝室）に案内してくれた。そこでは一人、重症心身障害あるいは神経筋疾患と思われるドロレスさんという中年のご婦人がベッドに寝ておられた。彼女は寝たきりでエアー・マットを使っておられたが、こちらに愛嬌のある笑顔を見せてくださり、また、上手な手踊りも披露してくださった。そこにはステラさんという自閉症の老婦人もおられ、明るい室内で静かに椅子に座っておられた。他の入居者のドーミトリーも見せてくださいとお願いしたところ、ルーシーさんは二階に上がる階段の頑丈な鉄格子の大きな錠を開けてくれ、我々は二階のドーミトリーに通された。そこは風通しの良い広いフロアーで、７つか８つのコンパートメント（仕切りで区分けされた部屋）に分かれていた。一つのコンパートメントは二十畳ほどで十分に広く、中に三台ほどのベッドが置いてあり、洗濯物が干してある部屋もあった。他にも日当たりのよい屋外に共同の洗濯場

兼物干し場があった。ドーミトリー壁の誰もが見えるところにイエス・キリストの絵が懸かっていた。

ヒアシンスさんによれば運営費はキリスト教団体や銀行や企業からの寄付、バザーや青空市の収入、100年以上前からのシスターたちの貯金でできた多額の基金の利子等とのことであった。シスターたちは給料をもらってもお金を使わないので蓄財されて基金になっているということだった。政府からの援助は微々たるものだそうである。クアラルンプール日本人会でも月に二回ほどボランティア活動を行い毎年寄付もしている。

クアラルンプール日本人会館にて（写真５）

滞在中のある晴れた日、マレーシアを一緒に訪問した井上教授御夫妻、高橋先生、私の４名は高柳一夫領事の運転される車でクアラルンプール日本人会館（ＪＣＫＬ）に向かった。同じく日本国大使館書記官の柳沼宏さんが同乗された。クアラルンプール市街の丘の上にあるＪＣＫＬは大日本帝国旧日本人学校跡地に建てられた近代的な建物である。ＪＣＫＬの講堂で私は「日本の高齢者における摂食嚥下障害と栄養管理について」および「秋田市における知的障害児福祉の歴史について」の二つの講演をさせていただいた。私の話を聞きに来られた方々は、在マレーシア日本国大使館の柳沼宏様ならびに高柳一夫様、クアラルンプール日本人会事務局のシャロン様、クアラルンプール日本人会婦人部かとれあ会会長の南様、また、高柳亜利様（領事の奥様）、松本様、殿塚様、川村様、田中様、村田様、など同会役員の面々、教員の高木明宏様、南国暮らしの会の長田ケイ子様たちであった。

写真５　クアラルンプール日本人会館（ＪＣＫＬ）講堂にて

在マレーシア日本国大使館の職員の方々、かとれあ会の方々とご一緒に。

世界は決して冷たくはない

マレーシアの知的障害福祉施設が町のど真ん中に堂々と存在し、しかも施設の利用者の方々があれほどまで我々を歓待し溢れる笑顔で接してくれたのは一体どういうわけなのだろうかと、マレーシアに滞在中も、また日本に帰国してからも私はずっと考え続けていた。また、どの施設でも写真撮影に関しては職員もご本人も、どうぞご自由にお撮りくださいと言ってくださり、撮影に際してはこちらに笑顔を見せてくださった。これらのことは日本と明らかに異なっていた。

デイスプリング知的障害児施設は中国人社会の相互扶助的団結の中で、中国人居住区において地域の欠くべからざる重要な施設として創られたと考えられる。彼らにとって毎日通う施設を自分たちの居住区内に作ることは当然である。親たちは子供の通所にバスなどの公共交通機関を使うことも多い。公共交通機関はクアラルンプールでは市街地でのみ運行しており、施設が郊外にあったのでは通所が困難である。施設が市街地に作られたのはそういうことも関係ある。ユナイテッド・ヴォイスは、障害者の権利を擁護し共生社会の実現を目指すという崇高な理念のもとに、民族や宗教の隔たりなく啓蒙活動や社会的企業活動などを行う組織である。施設が市街地にあることは啓蒙活動や社会的企業の運営に都合がよく、彼らの理念に適うことである。また、ブキナナス施設はもともとカトリックの学校として建てられ、孤児院になってからも教会とともに存在してきた施設である。教会はキリスト教国では町の中心にあるので教会に附属する建物の中にあるブキナナス障害者入所施設も町の中心にあるのである。

我々の住む日本では障害福祉施設は稀に市街地にあるが、どういうわけか、多くの施設は海岸近くの松林の中や山の麓、あるいは山陰などの人目に付きにくい寂しい場所にある。まるで日本の社会が障害のある人や子どもを辺鄙なところに幽閉しているかのような印象を受ける。日本のように施設が人の行かないようなところにあったのでは障害を持つ方と一般の方が共に生きていくことには支障が生ずる。クアラルンプールでは障害福祉施設が堂々と市街地のど真ん中にあった。日本とマレーシアの違いは、やはり風土・文化・ものの考え方の違いであろうか。おそらくマレーシアにおいては、施設を利用している障害児者は「自分はれっきとしたこの地域の住民であり、みんなから大切にされて守られている」という意識があるのではないか。施設の利用者が笑顔で接してくれたのはこのような意識のもとで本人たちが常日頃から自らを取り巻く社会や人々の善意に感謝しているからであろう。私は今回、マレーシアの施設の福祉関係者や本人たちに接し、障害を持つ人々を地域社会が優しく包み込んでいるような暖かさを感じた。マレーシアにおいて地域住民の心から生まれ、心で育まれ、心の通った福祉文化が醸成されていることを日本の社会は大いに学ぶべきであると感じた。日本社会は障害児者を排除・隔離するのではなく、包含・共生することを目指すべきである。私を含む障害当事者は日本の過去の因習に甘んずることなく、どんなに生き難くても自分は一人の人間なのだという気概を持って、各人かけがえのない人生を生き抜くことが大切である。

私にとって今回の訪問で得られた最も意味のあることは、我々と同じ気持ちで日々障害児者と向き合っている方々が世界中に大勢いることが分かったことである。世界は決して冷たくはない。マレーシアでは政治的・経済的に厳しい状況の中で福祉関係者たちはしっかりとした信念を持って知的障害児者と向き合い、誠実に社会福祉活動を行っていた。障害のある方本人たちも福祉を施す側の気持ちを素直に受けとめて元気に生きていた。日本にいて障害児者の医療・福祉の仕事に日々精を出されておられる皆様、また、障害児者の保護者の方々、そしてまた障害児者御本人の方々、いろいろ悩むこともあるであろうが、悩んでいるのは決して日本にいる我々だけではない。世界中どこでも医療福祉関係者、保護者、更には障害のある御本人たちも皆各人各様に悩みながらそれぞれの人生を生きているのだ。世界の仲間と心でつながりながら、この長い道のりをみんなでゆっくり歩いてゆけたら嬉しいと感じた。

エピローグ

十二月のある寒い日の朝。いつものようにエイスケを小学校に送る道すがらグランドに差し掛かった時である。俄かに音もなく雪が降り始めた。初雪であった。エイスケはふと立ち止まり、真っ赤なほっぺをして、ゆっくり空を見上げた…。「ゆきがふる。ふゆ…」エイスケが静かに呟いた。

季節感だ！と父親は思った。…エイスケは冬を感じたのだ！

親子は何とも言えない幸福感に包まれながら、ふわりふわりと綿雪が舞い降りる広いグランドのど真ん中で、時の経つのも忘れて暫し佇んでいた。

謝　辞

在マレーシア日本国大使館領事高柳一夫様ならびに奥様の亜利様にはお忙しいご公務の中、今回のクアラルンプール福祉施設訪問に際しまして日程調整、クアラルンプール日本人会との調整、車の手配、さらには自ら車を運転されて御案内して下さるなど本当にお世話になりました。恐縮至極でございます。大変に有難うございました。また、在マレーシア日本国大使館書記官柳沼宏様にはお忙しいご公務の中、ご助言とご教示をたまわりまして大変に有難うございました。クアラルンプール日本人会事務局長三徳智久様ならびにシャロン様(顔葉子文様)、かとれあ会の南美恵子会長、高柳亜利様(再掲：領事奥様)、松本万恵様、殿塚久美様、川村豊子様、田中明美様、村田様などかとれあ会役員の皆様には視察施設との交渉、日程調整、また三箇所すべての施設の視察に御同行いただき、さらには通訳や御説明をしていただくなど大変お世話になりました。大変に有難うございました。高木明宏様、また南国暮らしの会の長田ケイ子様、ご助言とご教示大変有難うございました。デイスプリング・スランゴール知的障害児者通所訓練施設に通所されておられる皆様方、また理事長のジミー様と園長のマダム・ジプシー・カラマール様、我々の訪問を受け入れてくださり、また丁寧なご説明をいただき大変有難うございました。ユナイテッド・ヴォイス・クアラルンプール知的障害者通所センターに通所されておられる皆様方、また施設の職員のウェイ様、我々の訪問を受け入れてくださり、また丁寧なご説明をいただき大変有難うございました。ブキナナス障害者入所施設に入所されておられる皆様方、また、シスターのヒアシンス様、ルーシー様、アンドレア様、ベティー様、また、ボランティアのローレン様、我々の訪問を受け入れてくださり、また丁寧なご説明をいただき大変有難うございました。日本におきましては、全日本手をつなぐ育成会国際交流事業部の袖山啓子様からは今回の視察につきまして励ましのお言葉とご助言を頂戴いたしまして大変有難うございました。秋田大学前副学長井上浩先生(現秋田大学名誉教授)ならびに奥様の啓子様、秋田大学工学資源学部高橋圭太先生、今回マレーシアに行く機会を与えてくださり、また施設訪問を含めまして私のマレーシア滞在中御同行くださり、また、ご助言とご指導をいただきまして大変有難うございました。若竹学園施設長星野健一様ならびに職員の鎌田雅之様、竹生寮の平川英勝様、柳田新生寮寮長田口武史様、杉の木園統括管理者澤田修明様ならびに杉の木園園長進藤香代子様、施設の訪問に際しまして大変お世話になり大変に有難うございました。私の勤務いたします医療法人正和会の理事長小玉敏央先生には、私のマレーシア渡航を許可してくださり、さらには渡航中に私の勤務する医療法人正和会介護老人保健施設ほのぼの苑における業務を代行してくださるなど大変お世話になり深謝申し上げます。最後に、私の留守の間三人の子どもの面倒をみて家庭を守ってくれた妻の節子に感謝します。

文　献

ラジェンドラン・ムース著「マレーシアの社会と社会福祉」明石書店、2002年